

繩文の野性

縄文の野性

太一郎句集

鈴木太一郎 句集 ㄟ縄文の野性ㄟ

著 者 鈴 木 太 一

住 所 〒 3 4 9 — 0 1

蓮田市大字馬込 1, 887 の 2

電 話 0487 — 6 8 — 1 3 9 9

発 行 昭和 60 年 5 月 30 日

印 刷 関 東 図 書 株 式 会 社

序

瀧

春

一

太一郎さんは律義で無口だが、決して冷やかかではない。控ええ目なあたたかい心の人である。

自分では生活記録だけの句のように言っているが、曖昧なところがなく、リアリズムのきびしい表現を崩していない。

肺疾で、闘った病床の句にも、暗さは感じられない。

雲の峰翔び越えてくるナース驚

こんなユーモア調の句もある。

如月の街角に巻くスパゲッティ

空つ風にくるくるばあの鮑屑

長い公務員生活の感じられる句がある。

春雷や大きな椅子にこだわりて

ひた隠す小吏の個性生ビール

花曇りつづく出戻り司書勤め

身を反らす処世いつしか蟻螂老ゆ

官職の肩書哀れ春埃

公務員には、職階があり、黙って仕えなければならぬこともあると想われる。併し古代の遺跡・古墳などを調べるような心に叶う仕事もあるに違いない。

縄文の野性うすれし狗尾草

草笛に呼び覚まされし古代文字

「欧州旅吟」も悪くない。こういう句を絵葉書俳句などという人もあるが、僅か十七音で絵葉書のような美しい風景を表現出来たら結構では

ないか。

近頃私も急激に物忘れが多くなったが、不思議に遠い昔のことは忘れない。

いつであったか、埼玉の蓮田の句会で太一郎さんと一緒に句を作ったとき、私は「水に生きるもの皆見え来春の水」という句を出した。後で「見え来」は「見えず」の方がいいのではないかと思ひようになった。

小川の流れを見て作った句だが、澄明な水の底が明るくて、水に棲む小さな昆虫や目高の類がだんだん見えてくるという句に作ったつもりであった。だが、いつまで見ていても、実は何んにも見えなかった方が新鮮で、早春の実景を表現し得ていると思うようになった。どちらの句がいいか、一度太一郎さんに訊いてみたいと思っている。

伎芸山房にて

昭和六十年三月

昭 和	序 屏	
" "	跋 文	
30 29 年	文 年	26 年
10 12 10 10 5		
句 句 句 句 句		
	中 野 文 夫 兄	
22 頁	瀧 春 一 先 生	1 頁
18 頁		
15 頁		
11 頁		
10 頁		
	関 根 将 雄 画 伯	

昭									
和									
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
42									
年									
63	18	32	31	23	56	8	3	3	3
句	句	句	句	句	句	句	句	句	句
115	109	98	88	80	61	59	58	57	56
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁
55									

縄文の野性

秋の雷音しずもれば鬚を剃る

葉呑む水の香夏と思ひけり

山の家忘れられたる鯉幟

昭和26年

草 の 花 療 園 ど こ も 埋 め つ く す

療 園 の 外 は 働 く 稲 干 し あ り

癒 ゆ る 日 の 設 計 天 に 春 嵐

昭和 27 年

目 覚 め 易 き 此 頃 栗 の 花 咲 く 香

星 祭 る 男 ざ か り を 療 園 に

ベ ッ ト より 起 き ぬ 日 あり て 金 魚 死 す

容赦なく雷雨小さき花圃を打つ

秋霖雨病舎のどこも単調に

刈田の匂ひ野良着の主婦が病室まで

埋 火 や 病 身 若 さ か く 萎 え て

寒 月 光 付 き 添 ふ 母 を 浮 き 立 た す

枯 草 に は ね 返 さ れ る 恢 復 期